

SR101に近いが、子葉の形状がやや異なる。丸瓦 25 の内面には板ナデが施されるが、わずかに布目が残る。軒平瓦 26 は四重弧文のSR201である。顎を接合したと推測される接合痕を確認できる。均整唐草文軒平瓦 27 の文様パターンはSR203Cに近いが、より簡略化されている。軒平瓦 28 は、内区に唐草文、外区に殊文が配される。これまでの白鳥廃寺跡では知られていない型式である。軒平瓦 29 は、上段（外区）に珠文、中段（内区）に唐草文、下段と左右（外区）に鋸歯文が配される。これも白鳥廃寺跡での出土が知られていなかった型式である（SR205）。軒平瓦 30 はSR203Aとみられる。軒平瓦 31 の文様は、上段（外区）の珠文、中段（内区）の唐草文、下段と左右（外区）の鋸歯文で構成される。29とは唐草のパターンが異なる。32は瓦当のみが剥落した軒平瓦で、上段（外区）珠文、中段（内区）唐草文、下段（外区）鋸歯文の文様構成となっている。29または31と同一の文様かは不明である。33～37は瓦当が剥落した軒平瓦である。平瓦 38 の凸面は縄目タタキの後、一部すり消しが行われている。39の凸面は、板ナデにより縄目の残存は限定的である。

第3トレンチ（北東コーナートレンチ、塔基壇東辺北部）

14は軒平瓦SR202とみられる。40・41・44～47「塔土壇北東コーナー」「塔基壇北東コーナー」として取り上げられているため、塔基壇東辺北端部で検出された瓦群の一部だろう。42は「塔土壇北東コーナー灰色土」、43は「塔基壇北東コーナー灰色土」の取り上げである。塔基壇東辺北端部と推測されるが、「灰色土」がどの層に対応するかは不明である。40は八葉複弁軒丸瓦SR102である。軒丸瓦41は磨滅が著しく文様は判然としないが、外区にかろうじて珠文が確認できる。白鳥廃寺跡でこれまで知られている軒丸瓦とは異なる文様の可能性がある。軒平瓦の42・43は、上段（外区）に珠文、中段（内区）に唐草文、下段（外区）に鋸歯文をもつ。29・42・43は同一文様とみられる。均整唐草文軒平瓦44はSR203Aである。顎の一部に格子目タタキが認められる。45もSR203Aの可能性はある。平瓦46・47は桶巻き作りで、凸面には縄目タタキが施される。

塔基壇肩（出土調査区不明）

SR203Cとみられる軒平瓦48は「塔基壇肩」で取り上げられているが、調査区は不明である。

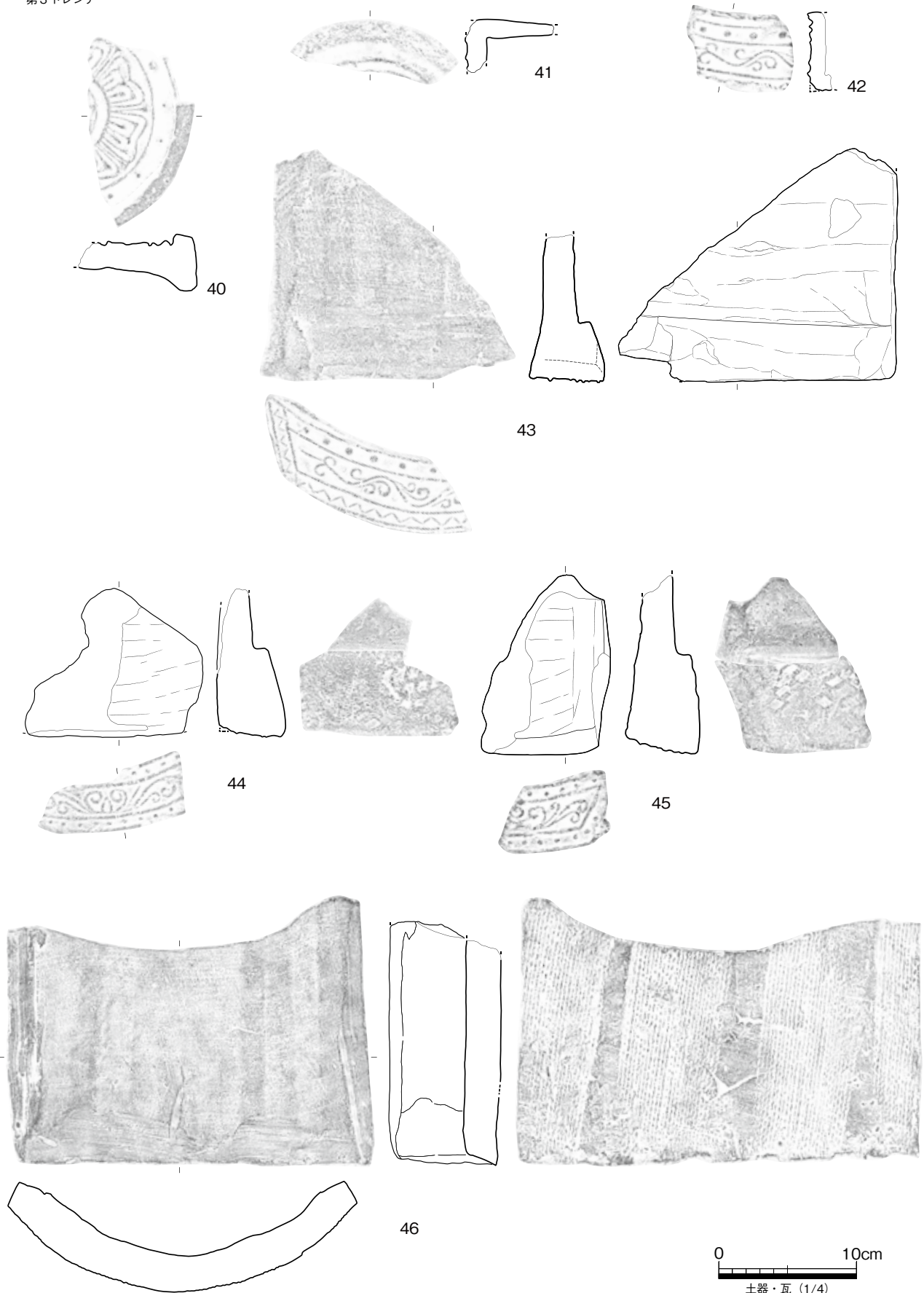
第4トレンチ（南東トレンチ、塔基壇南辺から石列）

49～56は、取り上げ時の記録に「石列」とあるため、第4トレンチ南部で検出された石列周辺の出土だろう。ただし、「石列」が塔基壇南辺の石積を指すのであれば、これらの遺物が塔基壇に伴うことになる。50・52・54については「石列より下の層」で取り上げられているが、第4トレンチ断面図では石列は基盤層直上にあるため、出土層位は不明である。49・50・51は八葉複弁蓮華文軒丸瓦SR102である。52は八葉複弁軒丸瓦SR101とみられる。53・54は四重弧文軒平瓦SR201で、断面に顎の接合痕が認められる。軒平瓦55は小片で型式の特定が困難だが、SR203Aとみたい。56は均整唐草文軒平瓦SR203Aである。

第5トレンチ（南トレンチ）

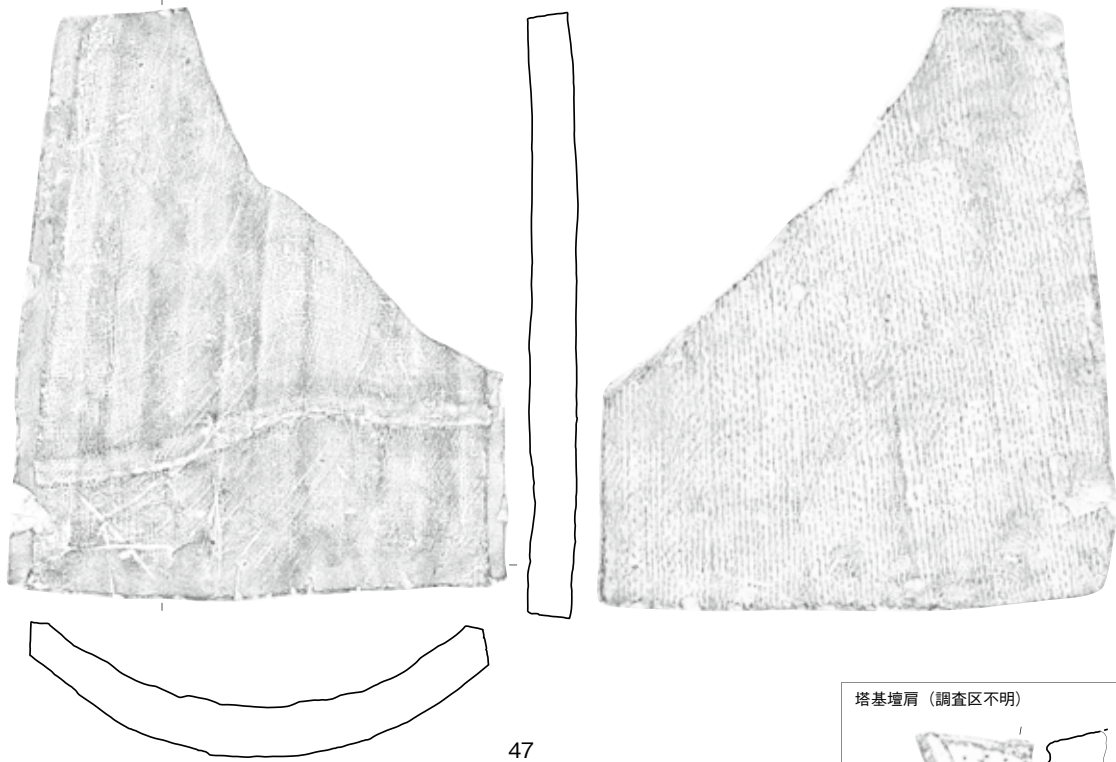
57は「第4・5層（灰色粘土）」で取り上げられているため、第1図4・5層の古代以降堆積土中の出土と考えられる。文様は判然としないが、軒丸瓦SR103Bだろう。

第3トレンチ



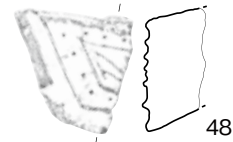
第42図 第3トレンチ 出土遺物実測図

第3トレンチ



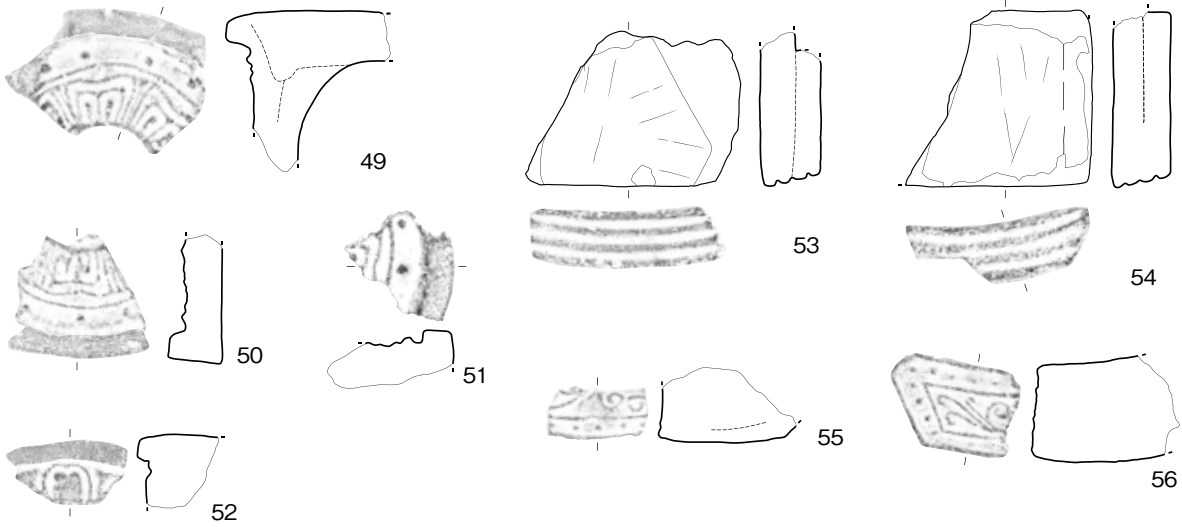
47

塔基壇肩 (調査区不明)



48

第4トレンチ



49

53

54

50

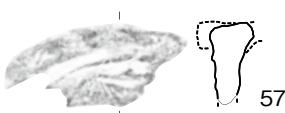
51

55

56

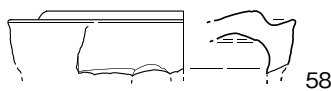
52

第5トレンチ

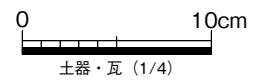


57

第1トレンチ

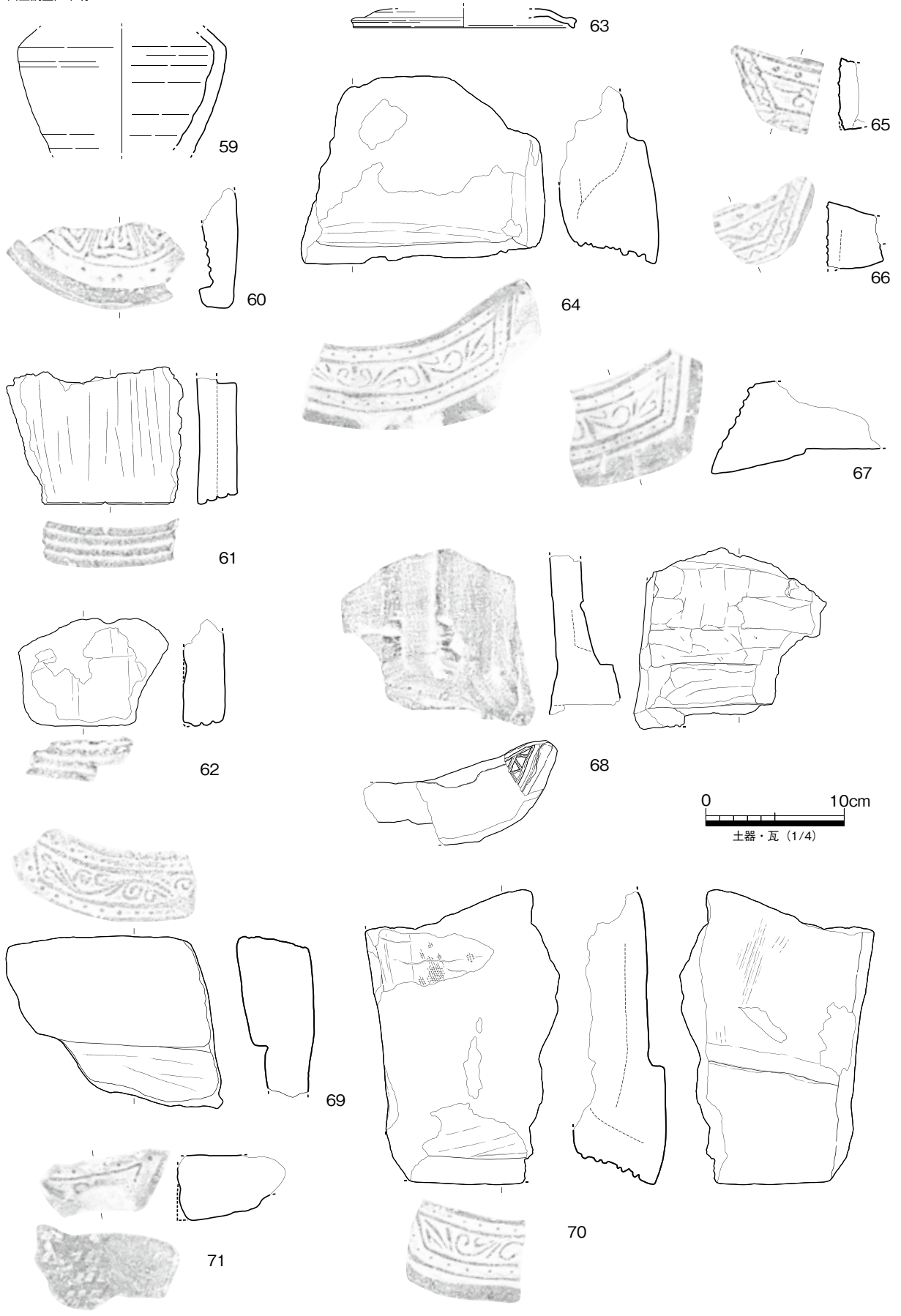


58



第43図 第3トレンチ・塔基壇肩・第4トレンチ・
第5トレンチ・第1トレンチ 出土遺物実測図

出土調査区不明



第 44 図 調査区不明 出土遺物実測図 1

第2 トレンチ (北東深堀トレンチ)

13はSR203Aとみられる軒平瓦である。

第1 トレンチ (北トレンチ)

58は須恵器硯で、陸と海には自然釉がかかる。砂粒を比較的多く含む胎土で焼成は良好である。

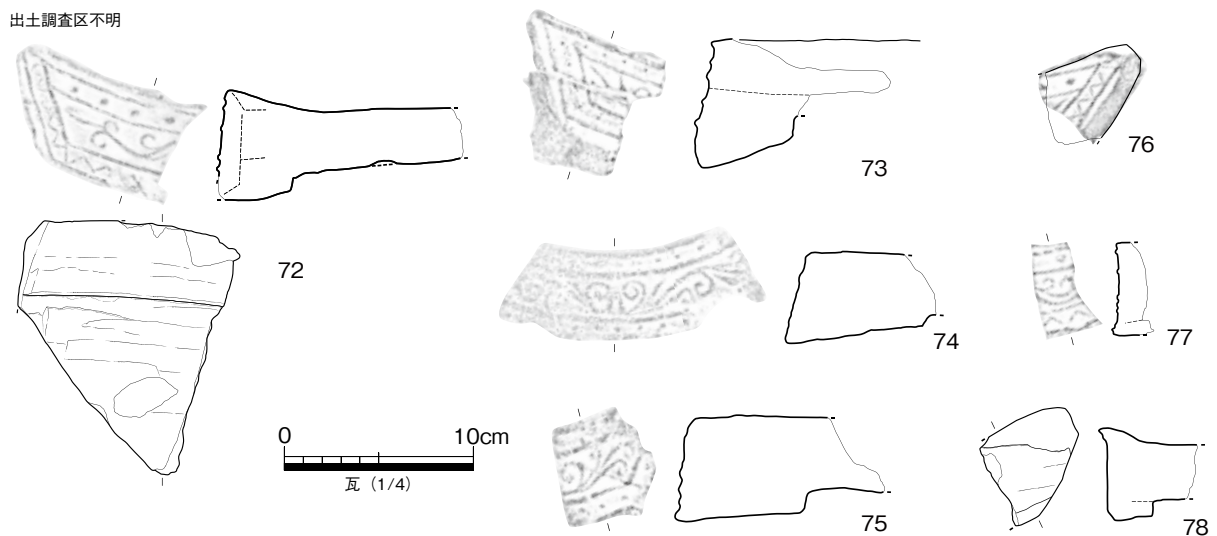
出土調査区不明

59は須恵器壺、63は須恵器蓋である。60はSR102の軒丸瓦だろう。61・62は四重弧文軒平瓦SR201で、61は顎の接合痕が認められる。64・67は均整唐草文軒平瓦SR203Bである。軒平瓦65・66・72の文様は上段(外区)に珠文、中段(内区)に唐草文、下段と左右(外区)に鋸歯文が施される。軒平瓦68の文様は、外区の左側に鋸歯文が残る。65または66・72と同文様の可能性がある。69・74・75は軒平瓦SR203Aだろう。70は軒平瓦SR203Cである。軒平瓦71の文様は判断しがたい。顎に格子目タタキが認められる。73はSR203Bの軒平瓦だろう。上段(外区)の珠文と外区左側の鋸歯文が残る76、および上段(外区)珠文、中段(内区)唐草文、下段(外区)鋸歯文で構成される77は、65・66・72と同文様の可能性もある。78は瓦当文様部分を失った軒平瓦である。

3 伽藍域を構成する施設の復元

(1) 塔基壇の復元

1968年、塔基壇は削平され、心礎以外の礎石は移動させられた。2・3次調査では、塔基壇の四辺を示す瓦群と集石が検出され、この調査成果を基にすれば塔基壇は南北13.8m(約45.5尺)、東西12.8m(約42尺)となる。集石の存在から、塔基壇は乱石積基壇であったことが推測される。第8トレンチなどの断面にみられるように、塔基壇は版築で構築される。現在、塔基壇は復元されているが、心礎のみが原位置を保っている。心礎の穴の直径は0.36mである。



第45図 調査区不明 出土遺物実測図2

(2) 西方基壇・西方建物の復元

西方基壇は1968年に一部削平を受けて、削平箇所から礎石が出土した。この後、1次調査が行われ、基壇の一部の断面図と写真が1次調査報告書に掲載されている。この断面図によれば、「地山層（黄色土層）」の上に約0.65mの盛土がある。盛土は「硬」い層を含む互層状になっている点から版築とみていいだろう。また、礎石（礎石の番号は1次調査報告書と対応する）は盛土上から掘り込んで設置されている。

現在、西方基壇と周辺には19石の礎石が存在する。これらのうち、礎石1～10は少なくとも1次調査以後には動かされてはおらず、本来の位置を保っていると判断した。これら10石の礎石の位置から、基壇上に四面庇の5間×4間の東西方向に長い建物（西方建物）を復元した。身舎を構成するのは礎石1～3・10で、1間は約1.5m（5尺）である。身舎から約1.65m（5.5尺）外側に位置する礎石4～9を庇とした。ただし、南辺の礎石7、北辺の礎石8・9は身舎の礎石と柱筋がずれる。

基壇は現在の地割から北辺と西辺を推測し、南辺は残存基壇の南裾とした。東辺は西方建物の中心軸で西辺を折り返した位置である。この復元では、西方基壇は東西約15m（50尺）、南北約10.35m（34.5尺）となる。

(3) 北方基壇の復元

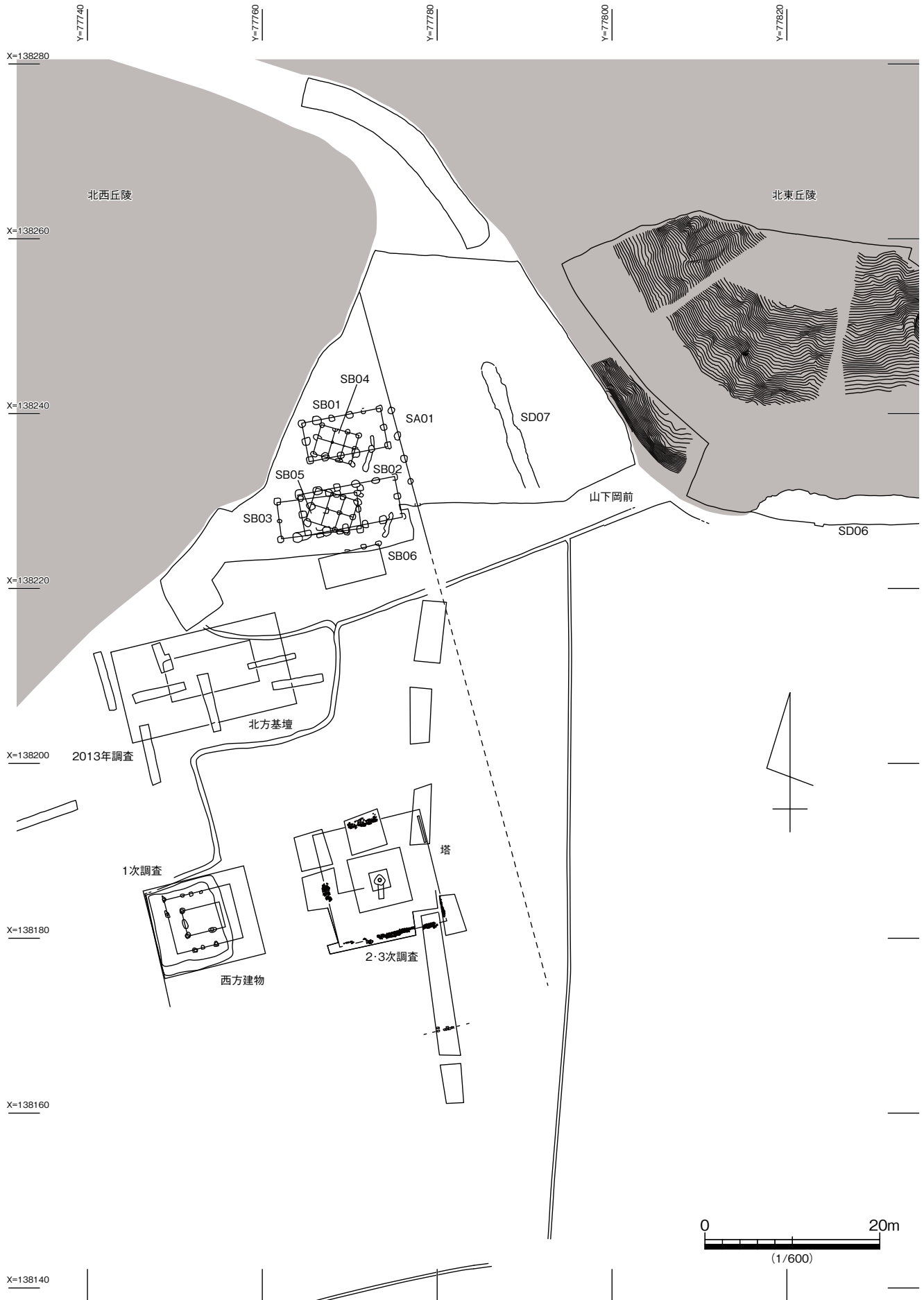
2013年調査では、伽藍内の現地形でもっとも標高の高い箇所にトレンチ状の8か所の調査区が設定された。これらの調査区では上下2段の方形の壇状遺構が確認され、下位の壇状遺構は東西約20m、南北約13m、上位の壇状遺構は東西約11m、南北約5mに復元されている。上位壇状遺構の南辺と北西隅には幅約1mの溝が巡り、溝から瓦と焼土、炭化物が出土している。軒瓦には、もっとも時期が下ると推測される軒丸瓦SR105を含む。上面での礎石や柱穴は確認されていない。調査時の所見によれば、約20×13mの方形基壇が形成され（先行基壇）、その後、周囲を削り落として約11×5mの方形基壇につくり替えられた（後出基壇）とされる。当該地点は標高も高く、耕作土および鋤床直下で後出基壇上面が検出されているため、基壇が中世以降の削平を受けている蓋然性は高い。このため、基壇上に礎石建物が存在していた可能性を考慮しておく必要がある。

(4) 山下岡前遺跡の概要

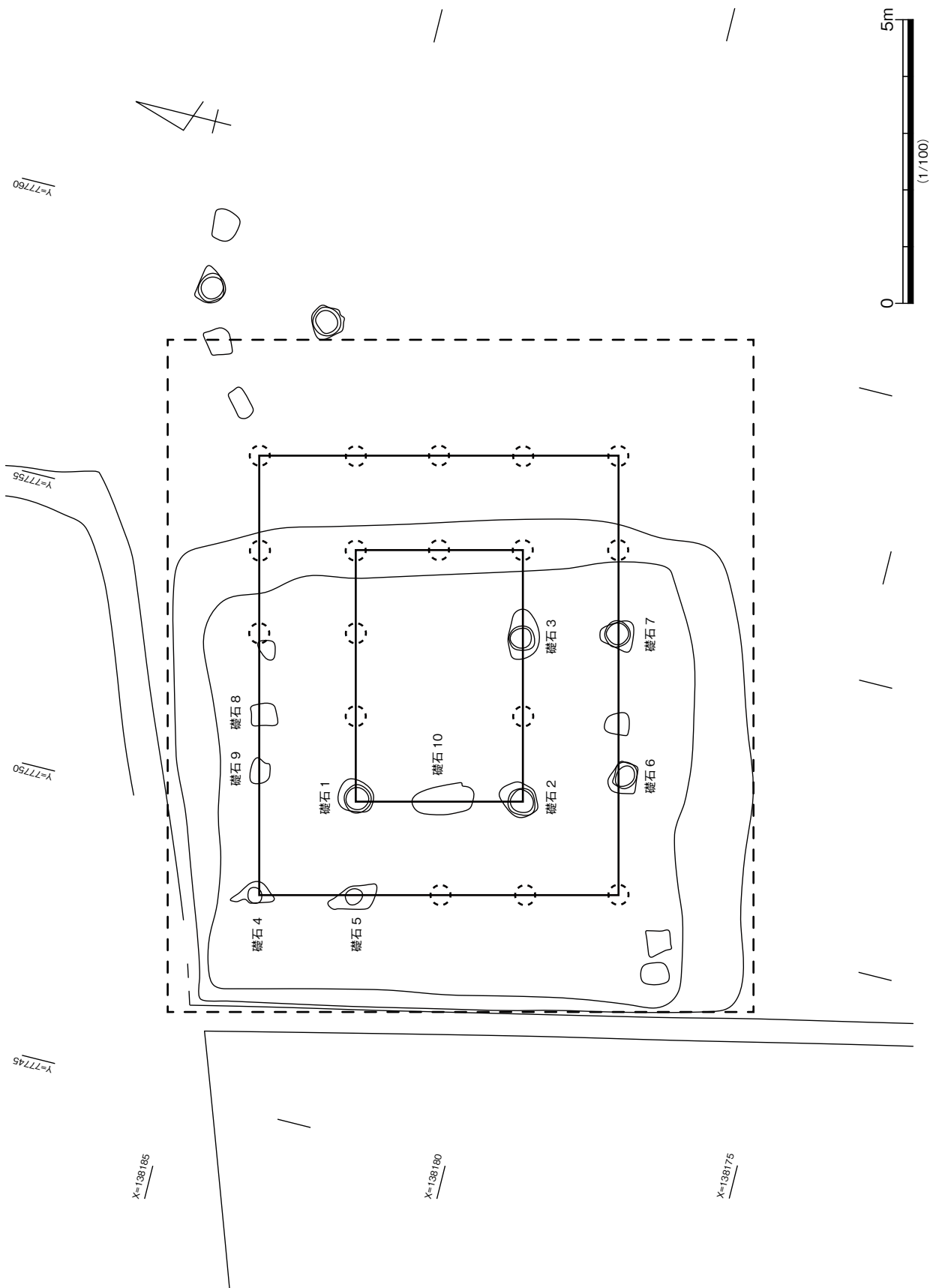
北方基壇の背後のやや標高が低い箇所は山下岡前遺跡として調査が行われた。北方基壇の北東には掘立柱建物SB06がある。検出されたのは調査地南際での柱穴3基のみだが、柱穴の並びが北や東に伸びないことが確実であるため、柵ではなく建物として復元した。

8世紀前葉に北方建物背後の谷が埋め立てによって整地された。掘立柱建物SB06は、この整地層以前に帰属するが、それ以外の掘立柱建物SB01～05、柵SA01、溝SD07は整地層上面から掘り込まれた遺構である。

北西丘陵裾近くには掘立柱建物がSB01～05が設置される。後述するが、これらの建物は柱穴の切り合いから3期に分けられる。建物群の東側にある南北方向の柵SA01は、SB03と併存し、近接するSB01・02、主軸方向を大きく違えるSB04・05とは併存しないと考えた。SA01以東に建物や柱穴が広がらないため、SA01は伽藍域東限を示す柵だろう。SA01がない時期についても、建物などはSA01



第 46 図 白鳥廃寺跡平面図



第 47 図 西方基壇・西方建物平面図

以西に収まるため、SA01 付近が伽藍域東限である蓋然性は高い。

本来の谷最深部に近い箇所にある南北方向の溝 SD07 は排水機能を有する溝とみられる。また、北東丘陵の南端部がカットされ東西方向の溝 SD06 が掘り込まれる。SD06 の南側になんらかの構造物が設置され、それに伴って SD06 が形成された可能性がある。

(5) その他

1 次調査で推定された南大門や中門、回廊については、現状では検討する材料がない。北方基壇の北の丘陵に窯の存在が指摘されているが、この点についても肯定する根拠は乏しい。

4 白鳥廃寺跡の伽藍配置と変遷

3 までの検討を踏まえて、白鳥廃寺跡の伽藍配置と変遷を示したのが第 48～51 図である。

1 期 7 世紀末～8 世紀初頭

塔、および金堂と推定される西方建物が配置される。西方建物の時期は不明だが、塔と同一時期とみておきたい。また、建物は確認されていないが、北方基壇も同時期としておく。北方基壇の北東には、機能は不明だが掘立柱建物 SB06 がある。

2 期 8 世紀前葉～10 世紀前葉

8 世紀前葉、SB06 廃絶後に背後の谷部が埋め立てにより整地される。伽藍域から出土している遺物のうち、10 世紀前後でもっとも新しい時期を示す山下岡前遺跡出土須恵器杯（ただし遺構には伴わない）から、白鳥廃寺跡の下限を 10 世紀前葉に置くことができる。このため、2 期は 8 世紀前葉～10 世紀前葉の幅でとらえられる。掘立柱建物の先後関係から 3 小期に細分されるが、各小期の時期を決定する材料はない。また、掘立柱建物の先後関係が確実なのは SB04 → SB01、SB03 → SB02、SB05 → SB02 のみである。

2-1 期

北西丘陵裾近くの掘立柱建物 SB04・05 の主軸方向は、塔基壇や西方建物のそれと大きく異なる。北西から北東にかけて傾斜する地形に合わせて建物主軸を決定した可能性がある。なお、SB04・05 と、2-2 期とした SB03 の先後関係は判然としない。2-3 期の SB01・02 と主軸方向が類似する SB03 を SB01・02 に近い 2-2 期とし、主軸方向が異なる SB04・05 をさらに古い時期と考えて 2-1 期とした。

SB04・05 の東側には、排水溝とみられる SD07 が設けられる。

2-2 期

塔基壇や西方建物と主軸方向が近い掘立柱建物 SB03 が構築される。2-1 期の SB04・05、2-3 期の SB01・02 は 2 棟セットのため、SB03 と対をなす建物が南側の未調査地に存在する可能性はある。

SB03 の東側には南北方向の柵 SA01 が設置される。建物や柱穴は SA01 以西にしか認められないため、SA01 は伽藍域東限を示す遺構とみていいだろう。

2-3 期

東辺をそろえる 2 棟の掘立柱建物 SB01・02 が設置される。SA01 が存在しなくても SA01 付近が寺域東限を示すとみられ、SB01・02 は伽藍域東限と北西丘陵の間の空間を可能な限り利用するように配

置されている。北方基壇の縮小は、仮にこの時期としたが、2-1期や2-2期にさかのぼる可能性もある。

おわりに

白鳥廃寺跡2・3次調査の報告および1次調査の再検討により、伽藍配置と変遷の提示を行った。讃岐国の古代寺院は20か所以上が知られるが、伽藍配置がある程度判明しているのは、讃岐国分寺跡、讃岐国分尼寺跡、開法寺跡のみである。白鳥廃寺跡も調査は行われていたものの、そのデータの公開は一部にとどまり、伽藍配置は1次調査時のイメージが独り歩きしていた感が否めない。こうしたなか、限られたデータからの復元ではあるが、白鳥廃寺跡の伽藍配置を提示する意義は大きいと考える。ただし、推測に基づく箇所も多く、遺構、遺物の解釈や、今後の調査によっては本稿での提示案が変更される余地があることを強調しておく。

調査一覧

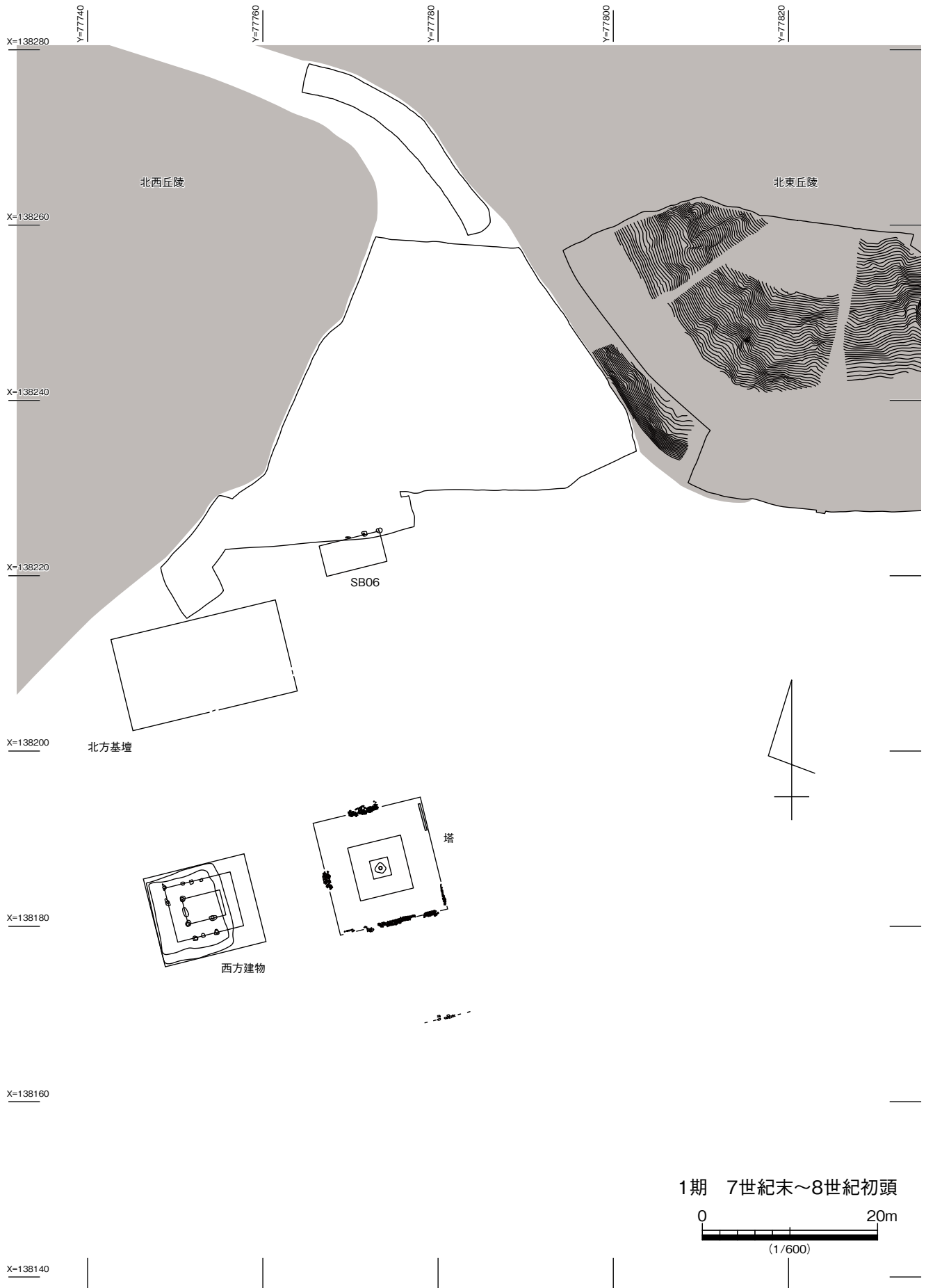
白鳥廃寺跡1次調査：1968年12月～1969年1月（昭和43年度）
白鳥廃寺跡2次調査：1953年2～3月（昭和57年度）
白鳥廃寺跡3次調査：1953年5月（昭和58年度）
白鳥廃寺跡2013年調査：2013年2月～3月（平成24年度）
山下岡前遺跡1次調査：2012年11月～2013年3月（平成24年度）

註

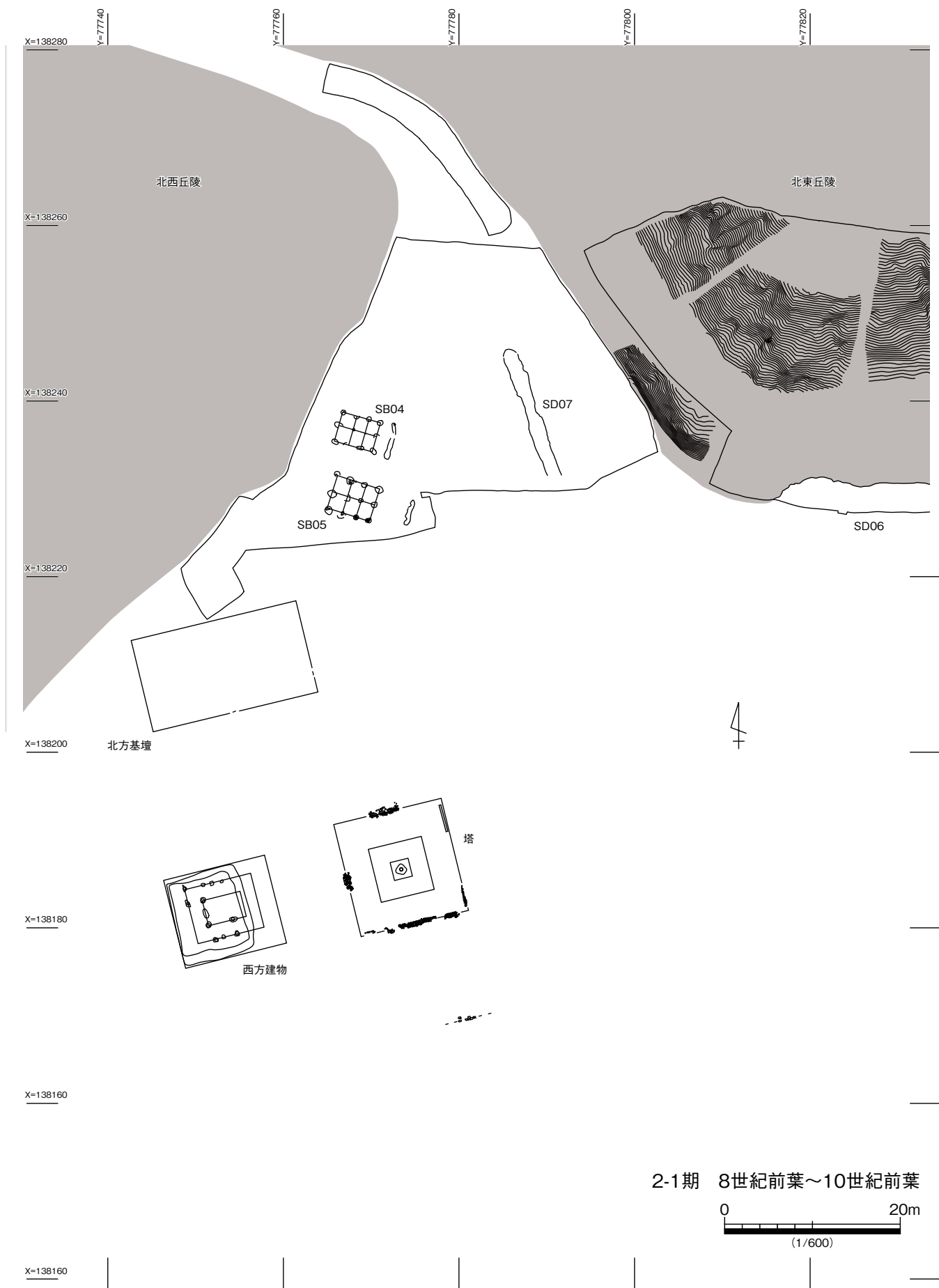
- 1 1は、六車（1969）、藤井ほか（1970）、発掘調査時の写真と日誌、当時の新聞記事などを参考に構成した。なお、写真と日誌は大川広域行政組合で保管されている。
- 2 軒瓦の分類は、高松市歴史資料館編（1996）を用いる。

参考文献

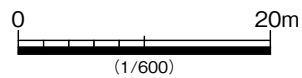
阿河鋭二 2014「県指定史跡 白鳥廃寺跡」香川県教育委員会編『香川県文化財年報 平成24年度』香川県教育委員会 ,p.88
伊沢肇一・大山真充 1983「白鳥廃寺」香川県教育委員会編『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』香川県教育委員会 ,pp.7-11
大山真充・松野一博 1984「白鳥廃寺（第3次）」香川県教育委員会編『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』香川県教育委員会 ,pp.9-10
高松市歴史資料館編 1996『第11回特別展 讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館
信里芳紀 2002「小谷窯跡出土須恵器の編年」財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編『高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小谷窯跡・塚谷古墳』香川県教育委員会ほか ,pp.199-221
藤井直正・六車恵一・溝渕茂樹 1970『讃岐白鳥廃寺跡調査報告 一昭和43年度一』白鳥廃寺跡発掘調査団・白鳥町文化財保護協会
六車恵一 1969「白鳥廃寺発掘調査概要」『文化財協会報』52, 香川県文化財保護協会 ,pp.4-5



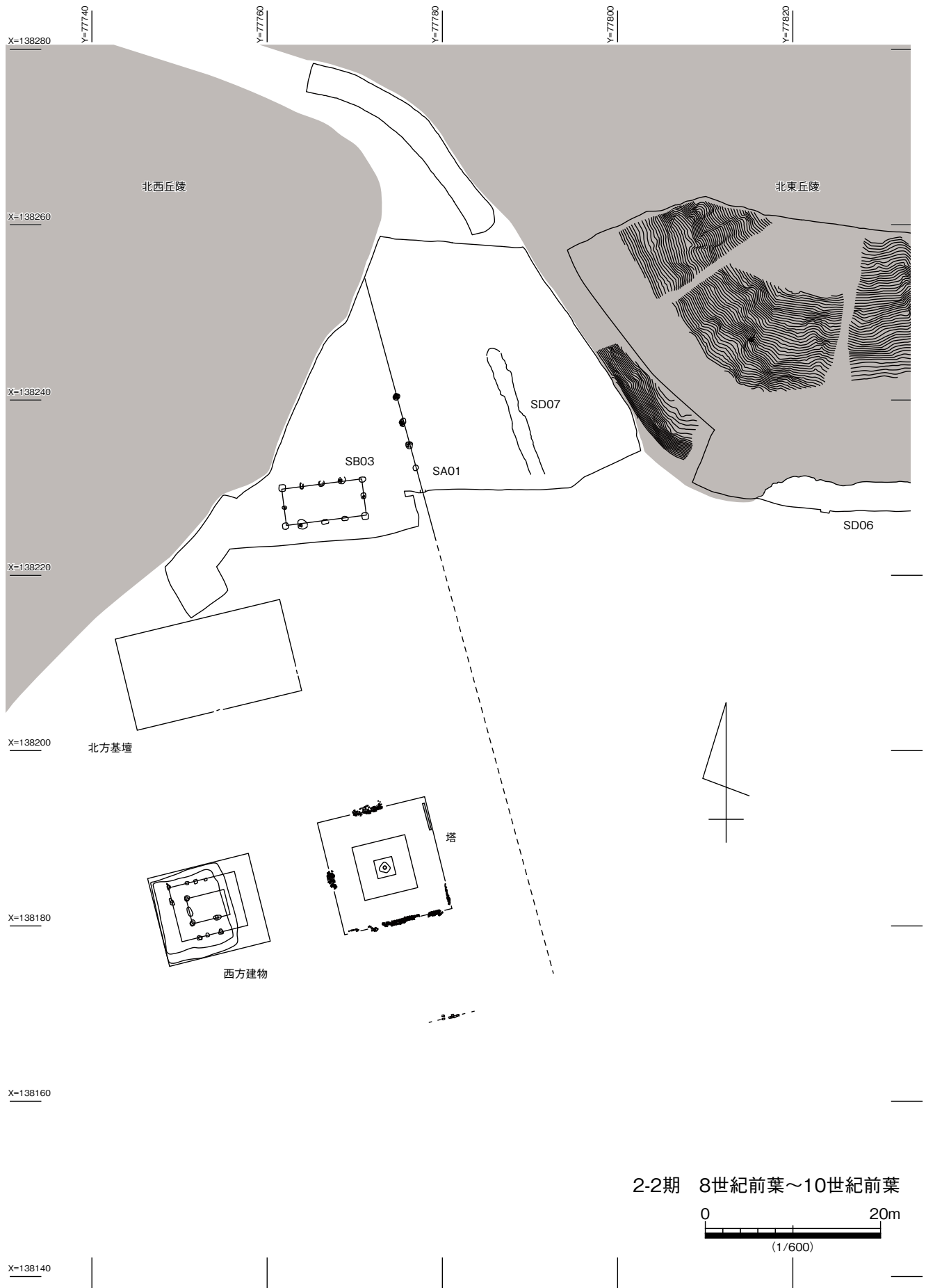
第 48 図 白鳥廃寺跡 伽藍配置変遷図 1 期



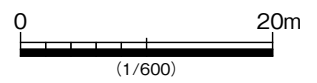
2-1期 8世紀前葉～10世紀前葉



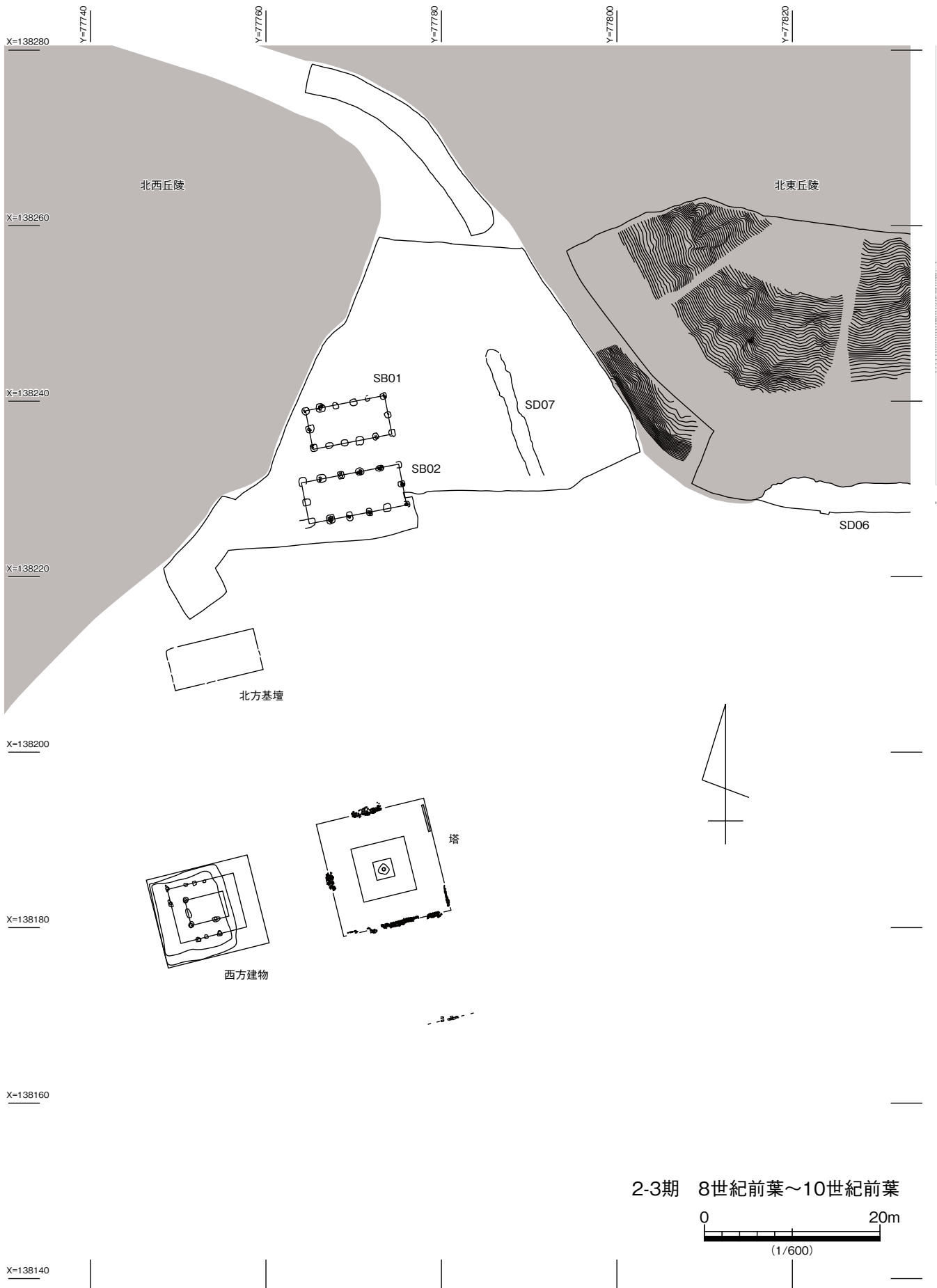
第 49 図 白鳥廢寺跡 伽藍配置變遷圖 2-1 期



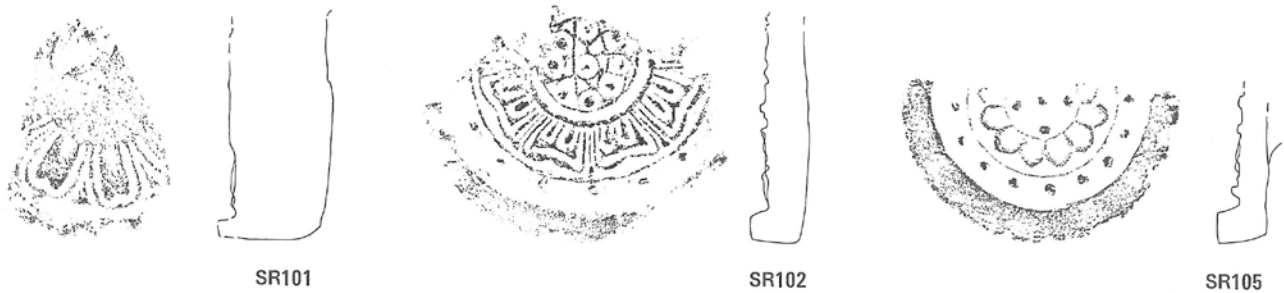
2-2期 8世紀前葉～10世紀前葉



第 50 図 白鳥廃寺跡 伽藍配置変遷図 2-2 期



第 51 図 白鳥廃寺跡 伽藍配置変遷図 2-3 期



SR101

SR102

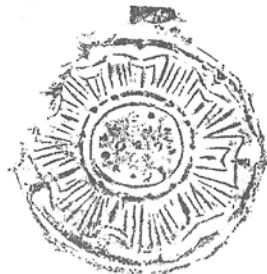
SR105



SR103A



SR103B



SR103C



SR201



SR202



SR204



SR104



SR203A



SR203B



SR203C

第 52 図 白鳥廃寺跡 軒瓦分類 (S=1/4 高松歴史資料館編 1996)